

な撫でを施した上に粘土を継ぎ足して整形している。

底部では、外面の最下段突帯から下方の調整に多様性が認められる。すなわち、縦刷毛のままで終わるもの（16・17・18）や刷毛のかわりに撫でを用いたもの（19）の他に、横刷毛を施すもの（20）がみられる。これらの外面端部は、指頭で強く押さえながら撫でる、撫でつけを施すものが多いが、18は横撫でを用いる。底面は17のように自重で内方へ曲がるものも多く、15では底部内面に粘土をつぎたして補強している。16の突帯はその上下を指頭で挟み、一定間隔をおいて強く押さえ、次に突帯端面に板状の道具をあてて整えている。

朝顔形埴輪（第20図21） 肩部から頸部にかけての破片である。調整は、外面に斜めなしいし横の刷毛、内面に撫でを用いる。

須恵器（第20図22） 器台の底部である。底面は若干外方に張り出している。上方には透しが穿たれているが、恐らく長方形であろう。現存部の上部に一条の、下部に二条の突帯があり、その中間には浅い櫛描波状文が施されている。器壁は薄く、胎土は精良である。

（土生田純之）

大市墓水道管取設工事箇所調査

大市墓の拝所内見張所に水道を設置するにあたり、昭和五十六年四月十日から六日間、水道管埋設溝掘削の際に立会調査を実施した。施工範

囲は、前方部向って右側角から御拝所までの延長八〇メートルの墳丘裾部である。工事の掘削は幅・深さとも〇・四メートルの布掘りで行った。範囲内を便宜的にA区からP区までの一六区間に分けて、遺物取り上げの便を計った（第21図）。

掘削溝の土相の状況は次のとおりである。

I 層 表土。

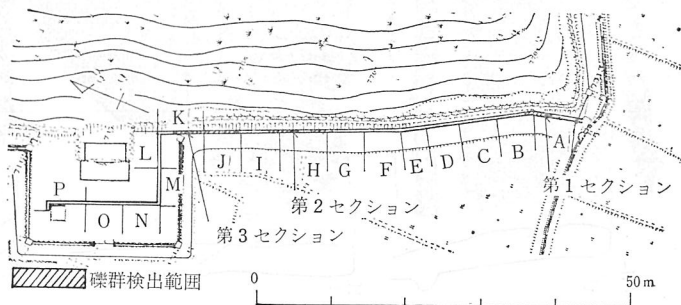
II 層 表土下の崩落堆積土層。やや軟弱な褐色粘質土。遺物を包含する。

III 層 II層直下の堆積土層。粘性を有する、やや軟弱な灰褐色砂質土。微量の遺物を包含する。

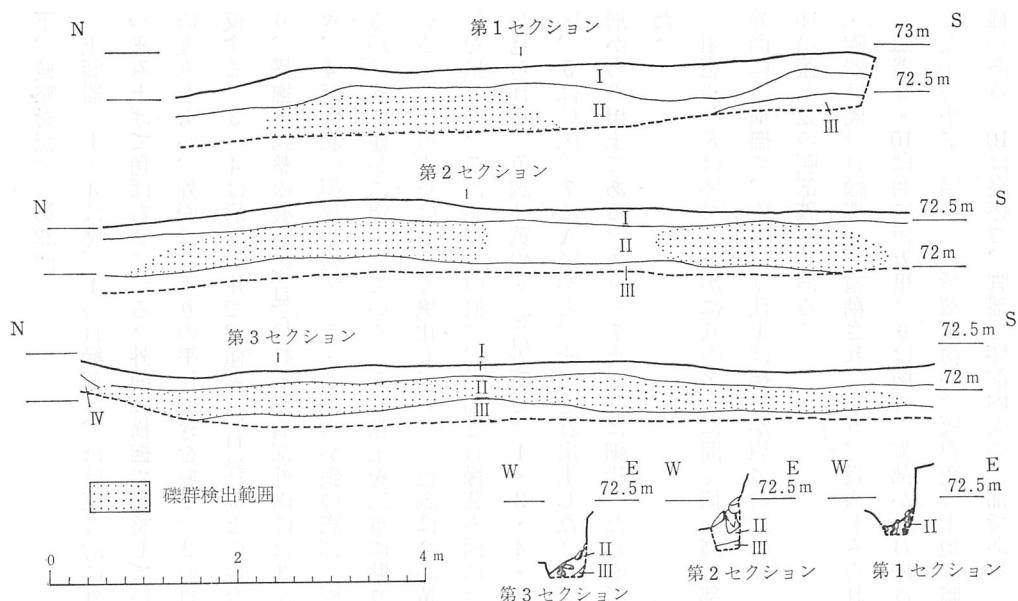
IV 層 拝所の盛土。黄色の砂。

里道沿いのA～K区ではI～III層が、拝所のK～P区ではIV層のみが認められた。ただし、B～Gの範囲では、III層に達しなかった。

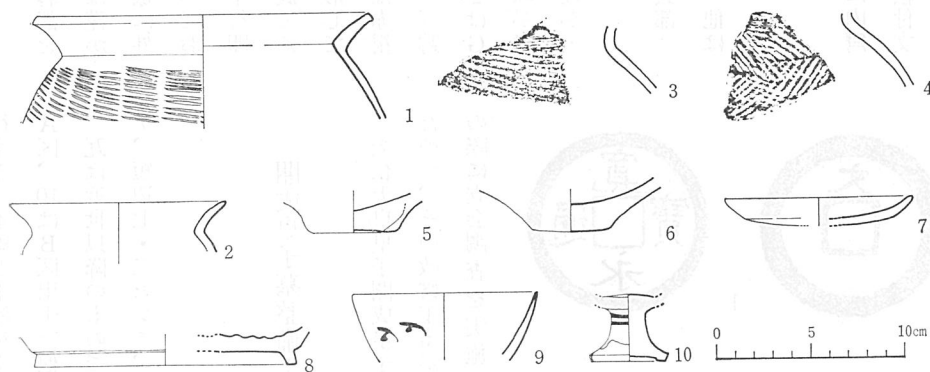
A区～B区の一部、G区とH区の境界部、H区後半部～I区前端部、J区全体～K区拝所際までの四箇所、II層から礫群が検出された（第



第21図 大市墓水道管取設箇所掘削位置 (1/1000)



第22図 大市墓石群検出範囲 (1/80)



第23図 大市墓の出土品 (1/4)

21図斜線部分、第22図)。

礫の大きさは一部三〇センチ大のものがあるが、大部分は径五〜一〇センチ大と均一している。礫を二〜三回に分けて除去した結果は、規則性をもって積まれた様子がなく、石の間には土が詰り、その中には、新旧両時期の遺物が混じって存在し、礫群は、ほぼII層内で終わっている。これらのことから見て、この礫群は葺石に使用されていた石が、土砂と共に崩れ落ちてきたものと思われる。遺物は第2セクションベルトIII層から土師器一点、他はII層全域から出土した。

以上のように保存すべき遺構は検出されなかったので、予定どおり施工した。

今回の調査で出土した遺物は、土師器一〇二点、須恵器四点、陶器一点、磁器一〇点、炆器二点、瓦一〇点、砥石一点の総数一三〇点で、全て小破片ばかりである。これらの遺物について、名古屋大学教授檜崎彰一氏に御教示を受けた。以

下、概略を記す(第23図)。

土師器

1~4は甕。1の口縁部は、ほぼ直線的に外反し、口唇部をつまみ上げて角ばらせている。外面は横撫で調整している。肩部は僅かに丸みをもち、外面に右下りの平行叩きを施す。2の口縁部も同様に外反する。3・4は肩部破片で、僅かに口縁部との接合部分が残っており、横撫で調整の痕跡が見られる。肩部外面には3が右下りの平行叩き、4が羽状の叩きを施す。5・6は壺か甕の底部。両方とも平底であるが、6は僅かに突出している。5は粘土を二重に貼り付けて成形している。以上の六点はひどく風化している。色調は2が黄褐色の他は赤褐色を呈する。7は手捏ねの皿で、内面と口縁部外面には撫で調整の痕跡が見られる。色調は黄褐色を呈する。1・3・4・6はH区、2はG区、5はC区、7はA区から、それぞれ出土した。ただし、4のみがIII層からの出土である。これら7点以外は細片のため原形を知り得なかった。

須恵器

8は坏で、僅かに八の字型に開く低い高台部を有する底部。外面には横撫で、内面には仕上げ撫でが施されている。A区出土。他は坏の蓋と甕の胴部破片である。

陶器は碗の口縁部で、施釉されており、貫入がみられる。

磁器9・10は共に伊万里。9は碗で、胴部から口縁部まで僅かに内彎しながら小さく開く。口唇部は薄い。灰白色の素地に暗緑色の下絵付文様がある。10は高坏で、脚部と坏部内面の一部である。脚部上半に、並

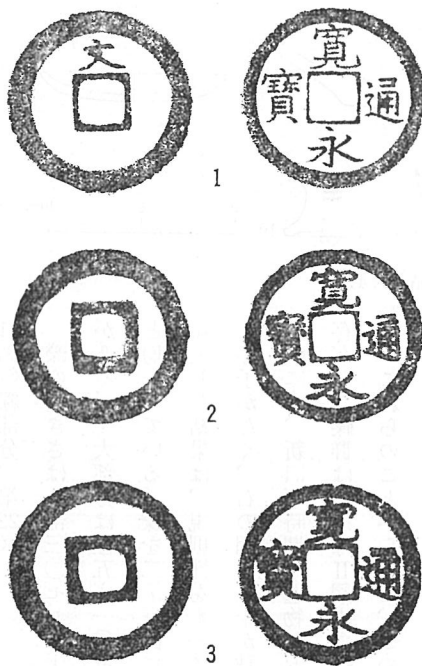
行する二本線の下絵付文様がある。坏部内面には貫入が見られる。9はA区、10はB区出土。他は碗の口縁部や器形不明のものであった。

瓦は近世以降のもので、炆器はいずれも器形不明。砥石は長辺八センチ、短辺七・二センチ、厚さ五・六センチの長方形で、砂岩製である。

(佐藤利秀)

開成皇子墓整備工事立会調査

光仁天皇皇子開成皇子墓の石塔の基壇が、経年のためにゆるみを生じたので、その改修工事が行なわれ、昭和五十六年九月十四日の基壇解体の際に立会調査を実施した。当墓は勝尾寺背後の山頂にある宝篋印塔



第24図 開成皇子墓出土寛永通宝拓本(原寸)